

先日友人からメールが届きました。原因不明の頭痛、胃のムカムカ感、首の後ろの苦しさ等の症状が続き、体調不良になったとのこと。彼女には思いあたる節がありました。それは春に愛犬2匹が、激しい嘔吐、下痢、腰抜かし、ぐったりという症状になり、病院にかかり、治療を受けました。原因は庭木の青梅、クリスマス・ローズなどの毒に当たったのではないか、という診断で、大枚の治療費を使ったとのこと。早速庭木を処分なさったのです。

そして、数日前にワンちゃんと同じ症状が友人本人に！早速治療を受けて、平常に戻られたようですが、原因はお庭の植栽の洋種ヤマゴボウが強い毒性があることを知らず、可愛がって育てていたからではないかとのことでした。その木も大きくなっていたため、6袋に詰め込んで処分したとのことでした。いつもパワフルな友人ですから、本当にびっくりし、大変なことでした。



私はジュズサンゴを鉢で育てています。白い花が咲き、赤い実が出来て、さらに新緑の葉と紅葉を、春から晩秋まで休むことなく楽しめるので、可愛い鉢になっています。ところがジュズサンゴの赤い実を小鳥は食べません。毒があるのかしらと思って調べてみたら、ヤマゴボウ科の花で毒性がありました。赤い木瓜の花はあつという間についばまれてしまうのに、可愛いジュズサンゴの毒性を小鳥は知っていたのですね。自然の小さな生物のほう

のほうが、身の安全を図る力が本能的に与えられていると感じます。見た目の恐ろしい蛇などには毒があるかもしれないと想像しやすいのですけれども、美しい、可愛らしいものには、つい目を引かれ、毒があるかは見分けがつかず、私たちは愛でて、育てています。

C型肝炎やエイズなどの新薬開発の研究者だった友人は、絶対薬を飲まない主義にしておられます。ご自身が高血圧、糖尿病の症状がでたら、食事療法、運動療法という、自己免疫力で治療する努力をして、効果を上げています。その理由は薬には必ずマイナス、毒性の部分があるということでした。薬の研究者だけに恐ろしい話です。「毒を以て毒を制する」的な行為が投薬治療ということになるのでしょうか。ハーブを薬草として利用した女性が魔女とされた昔話もあります。神様は人間に免疫力を与えられましたが、他にとってはそれが毒となる場合もあるのでしょう。自然の不思議さに驚きます。

聖書の中で毒という言葉で思い出すのは旧約聖書では毒蛇、新約聖書では毒麦です。

刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。(マタ13:30)と「毒麦のたとえ」では麦も毒麦も最後の収穫の時まで育つままにしておきなさい。毒を持つものが傍にあっても、共に成長させ、刈るのは刈り取る者に任せなさいと告げています。刈り取る者が毒麦を最後にまとめて焼く、という言葉は興味深いこととして感じられます。これは、人を裁くことを神に任せよ、という意味でしょう。

むしろ、不気味な言葉として、

彼らは舌を鋭い剣とし／**毒を含む言葉を矢としてつがえ**(詩64:4)や

わたしを包囲する者は／**自分の唇の毒を頭にかぶるがよい**。(詩140:10)などの言葉に、自分自身の持つ毒の思いが、言葉に含まれるのを神様に見透かされている、と感じてしまいます。自分の言葉が毒性を帯びていないように、気を付けて調べなければなりません。